六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に





CREATOR INTERVIEW No.177

遠山夏未　Natsumi Toyama

デザイナー。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業。イッセイ　ミヤケで衣服のデザインをする傍ら、「衣」と「住」は身体を外側から包み、「食」は身体を内側から包むものであるとの考えのもと、最小限の食として"スープ"に着目し、衣食住の領域を横断しながら、身体を起点とした空間や体験のデザインを行う。主な仕事に、21_21 DESIGN SIGHT企画展「スープはいのち」の展覧会ディレクション・出展、「水を味わう 水を纏う／Savor Water, Embracing Water」、「青森りんごリトアニア北の暮らし・手しごと・デザイン」展の企画・ディレクションなど。また、21_21 DESIGN SIGHT「チョコレート」、デュッセルドルフ市立美術館「GENERATION MODE ―THE FASHION GENERATION―」などに出展。

田中義久　Yoshihisa Tanaka

グラフィックデザイナー・美術家。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。2022年centre Inc.設立。行政・教育・企業機関などと連携し、紙媒体における視覚言語を拡張しながら今日のデザイン領域をリサーチし、社会実装している。



NO
177 田中義久 グラフィックデザイナー・美術家
YOSHIHISA TANAKA / Graphic Designer, Artist

× 遠山夏未 デザイナー
NATSUMI TOYAMA / Designer

クリエイターインタビュー

『ビルが建つ前の更地を、自然を感じられる絶好の遊び場に』

変化し続ける都市に合わせて、衣食住にも身軽さを。

published_2026.06.10 / photo_kenta yokoyama / text_ ikuko hyodo

誰もが馴染みのあるスープを入り口に、古今東西の暮らしのあり方を通じて生命の根源に触れる、21_21 DESIGN SIGHT 企画展「スープはいのち」。展覧会ディレクターの遠山夏未さんと、アートディレクターを務める田中義久さんは、大学の同級生でもあります。ときに仕事をともにしながら、お互いの作品に関心を寄せてきた二人が、本展の協働で大切にした想いとは。衣食住やマテリアルなど、それぞれの探究テーマを交差させながら語り合っていただきました。

身体性に重きを置き、物語のページをめくるような展覧会を。

遠山夏未　企画展「スープはいのち」でアートディレクションをしていただいた田中さんとは、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科の同級生です。ゼミは違いましたが、学生の頃から存在はもちろん知っていましたし、何より私が田中さんのデザインや Nerhol のファンなんです。

田中義久　ありがとうございます。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



21_21 DESIGN SIGHT企画展「スープはいのち」

衣服や住まいという身体の外側の環境と、食という内側の環境を、ともに「身体を包む行為」として捉えてきた遠山さん。その原型は体内環境にも見られ、たとえば母体は「住」、胎盤などの胞衣（えな）は「衣」、羊水は「食」に相当すると考えます。本展は、そうした視点をもとに構成されており、布や音、香りによるインスタレーションをはじめ、写真、スープにまつわる展示資料などを通じて、五感で衣食住の根源に触れる内容となっています。2026年8月9日（日）まで開催中。

遠山　2007 年に Nerhol の作品を初めて見たとき、深く感動して。当時私は PLEATS PLEASE ISSEY MIYAKE の企画デザインに関わっていたのですが、路面店などのクリエイティブで田中さんといつか一緒にお仕事をしたいと妄想していました。アートディレクションを担当された 2018 年の竹尾ペーパーショウの展示も、本当に素晴らしかったです。紙という素材に対して、自らの身体を使って関わることを大事にしたインスタレーションで、来場者も実際に紙をちぎったり、異素材であるプラスチックの袋に紙を入れて持ち帰ることができたりする仕掛けが印象的でした。

今回の展覧会も、帰宅してからも鑑賞者のなかに残り続けるような、終わりのない形にしたいと考えたとき、真っ先に田中さんの顔が浮かびました。それと、私は物語性の強い作品を作ることが多いのですが、田中さんは作品集など本の装丁を多く手がけているので、ページをめくっていくような感覚で展示を構成してくれるのではという期待もありました。スープという抽象的で間口の広い題材を、一緒に丁寧に編集しながら、空間全体を作っていけると思ったのです。



Nerhol（ネルホル）

田中さんと彫刻家の飯田竜太さんによって2007年に結成されたアーティストデュオ。連続撮影された写真を重ねて、彫刻を施すポートレイト作品で注目を集め、その表現を深化。個展「Nerhol 水平線を捲る」（千葉市美術館、2024年）、「種蒔きと烏 Misreading Righteousness」（埼玉県立近代美術館、2025年）などを開催。

画像：Nerhol「種蒔きと烏 Misreading Righteousness」埼玉県立近代美術館、2025年

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

田中　遠山さんは大学の卒業制作のテーマも「旅するスープ」で、当時からスープのことを探求していましたよね。だから大量の資料とともに展覧会の相談を受けたとき、「やれることはお手伝いします」としか言いようがなかった（笑）。遠山さんは「物語」という表現をされましたが、旅をしながらスープに出会って体感していくことの豊かさや大切さは、私自身が最近、生活のなかで感じていたこととも重なりました。企画を一緒に進めながら、素直に感じたことを共有してもらえるのも面白く、他者と協働しながら一つの展覧会を作っていく醍醐味を感じることができました。

デザインの基本は「聞く」こと。

遠山　田中さんは覚えていないかもしれませんが、展覧会のキックオフで食事をご一緒した際に、「遠山さんがすくい取ろうとして、こぼれ落ちてしまったものを受け止めるのが自分の役割だと思う」と言ってくれたんですよね。それを聞いて「救われた!」と思いました。たとえば今回の《はじまりのスープ》という羊水のインスタレーションは、最初からやりたかったことの一つなのですが、デザインや美術の領域を越えて活躍している田中さんだからこそ、作品と鑑賞者をどのようにつなげ、いかにフラットな関係性として空間に落とし込むかという意図を深く理解してもらえたと思っています。私はどちらかというと感覚で生きているというか、情動的で言語化も苦手なほうなのですが、田中さんはロジックでも考えられるし、感覚的なところも共有できる。そのバランスにいつも助けられています。カウンセラーみたいに話を丁寧に聞いてくれて、自分のなかで整理できていないことを一緒に考えてくれる、ケアの精神があるんです。



はじまりのスープ

羊水は、人間が母体のなかで出会う「はじまりのスープ」。その塩分濃度は、人がおいしいと感じるスープと同じ0.9%で、うま味成分のグルタミン酸が豊富に含まれている。羊水と同じ塩分濃度を再現した水を湛えた器に、蚕が最初に吐き出す緒糸（ちょし）を垂らし、母体の鼓動が響く空間で羊水に包まれていた記憶を呼び起こすインスタレーション。

田中　デザインって、基本的には「聞く」ことだと思っています。不特定多数の人の補助になるというか、何かしら役立つことがデザインの役割じゃないですか。今言っていただいたようなやり取りもまさにそうで、展覧会ディレクターの遠山さんが何を伝えたいのかを、媒介者として第三者にどうやって伝えられるか考えていく。「こぼれ落ちたものを受け止める」のも、伝え方を間違えて誤解されないよう、いかに理解するかが大事だからです。ダイレクトに伝わるならもちろん、異なる視点や角度を持っているのも良いのですが、意図を誤読させないようにどうすれば伝えることができるか、その媒介となる手段を探っていくような立ち位置でやっていますね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.06.10 / photo_kenta yokoyama / text_ ikuko hyodo

「食」は消えゆくものを一番幸せな形で消費できる。

遠山　田中さんがおっしゃったように、私は学生の頃からやっていることが変わらなくて、「身体」というのが常に中心にあるんです。大学では空間演出デザイン学科のファッションコースで小池一子さんのもとで学んだのですが、身体空間をどうデザインするかとか、他者と自己の間の空間に生まれる感情とか、見えないものをつかみたいという気持ちが当時からあって。実際に着られるものはほぼ作っておらず、インスタレーションが主でした。

同時に、母体と胎児のように、命が一つであるとはどういうことかという根源的なテーマを大事にしていて、そこから「最小限の衣食住」という考え方に至り、食はスープに集約されていると思うようになりました。空間演出デザイン学科では、実空間のほかに音や光などを用いた空間表現も学びます。さらに私は舞台美術家の小竹信節さんのお手伝いもしていたため、物語性も身近なテーマでした。舞台芸術はその瞬間しか存在しないため、消えゆくものをいかに大切に作るかが問われます。一方で、食もまた消えゆくものですが、それを最も幸せな形で消費できる可能性があると気づきました。そこから、「今」という瞬間をデザインすることへと意識が向いていったのです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

田中　私たちが在籍した当時の空間演出デザイン学科の役割を改めて考えると、デザインという言葉に集約されてはいるけれど、ファッション、インテリア、グラフィックなど、捉え方次第でどの分野にでも行ける状態だったんですよね。たとえば、目の前にあるペットボトル一つをとっても、平面的なグラフィックとして視覚的に捉えるか、空間のなかにある立体物として捉えるかなど、いろいろな見方がある。それを明確に定義することもできるけれど、どう捉えるかはそれぞれでいいというか、あまり決めつけないような空気がありましたよね。曖昧とも言えるけれど、自分が専門的に学びたいことを 10 代で決めるのは難しいし、のちのち別にやりたいことを発見する人もたくさんいる。いろいろな可能性を受け入れてもらえる土壌として意義があったと思います。

私はもともと平面的なグラフィック志望だったのですが、空間デザインという環境に身を置いたことで、物理的な空間のなかで、情報をどう立体的に伝えるかという視点を身につけられたような気がします。

内側から外側へ、外側から内側へ。循環して表現する。

遠山　私はスープや衣服を、いわば概念として捉えています。身体が中心にあり、それを内側から包むのが食、外側から包むのが衣服や住まいというイメージなんです。なおかつ衣食住の原点は「食」だと思っていて。その前提に立ったとき、身体の内側から外側へのベクトルは、見えないものから見えるもの、つまり感覚から思考への循環ですよね。一方で、Nerhol の作品を含め田中さんの場合は、物質が内包する歴史や時間を身体にどう関わらせるかという、外側から内側への循環なのかなって思うんです。

田中　なるほど。ただ、生活の基盤である衣食住と比べると、美術は社会的にそこまで必要とされているわけではないですよね。とりわけ食は生死に直結するため、テーマが持つ切実さのレベルが違う気もします。美術として私がやっているのは、自分が最も得意とする方法論で世界を見つめる作業です。他者からすればどうでもいいことかもしれないけれど、気になった物事や存在を探るための手立てであり、掘り進めた先に出会えるものを見たいがために作っている。だからこそ、生存の必要性という点では、美術は儚い存在だと思っています。それぞれが得意な方法で世界を探求し、その結果見えてきたものを他者に問いたい。それが美術における私のスタンスです。

遠山　そこはとても共感します。大事なのは、世界をどう見て、何を感じ、どう作るか、もしくはどう生きるか。ただ、命に関わる食はレベルが違うと言っていたけれど、一見必要とされないものを作る営みにこそ、感情を耕し、文化を生み出す土壌があると思うんです。それは、人間が人間らしく生きるための糧になる。Nerhol の展示を見に行くたびに、「こういう世界の捉え方もあるんだ」という発見があります。しかも作品を通して歴史や背景まで掘り下げられているから、命のつながりのようなものが垣間見えて、救われるような気分になることもあります。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.06.10 / photo_kenta yokoyama / text_ ikuko hyodo

和紙から探る、自然と共生するマテリアルの意義。

田中　私が探究しているものの一つに和紙があるのですが、和紙に興味を持つ前から、単純に紙を触るのが好きでした。仕事で制作する本などは、紙の質感の違いを手触りなどの体験として作品に生かせる領域でもあったりするので。竹尾ペーパーショウでたまたま和紙のテーマを担当することになって調べてみたら、ものすごい技術が詰まっていることを知りました。テクノロジー的なものというより、職人の経験値のなせる業で、それこそ生活に密接している。日本人の無駄のなさというか、自然と共生するマテリアルの意義を今さらながら感じました。



竹尾ペーパーショウ

紙の専門商社・竹尾が主催する、日本国内の紙関連業界において唯一かつ最大規模の紙の展覧会。第1回開催は1965年。田中さんは第48回となる2018年に、アートディレクターを務めている。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

遠山　今回の展覧会でも多用されている、「土紙」には感動しました。ところで田中さんって紙をめくる所作が、とてもきれいなんですよね。紙の手触りや質感といった物質性と、長年真摯に向き合ってきたことを感じるというか。



土紙

風土によって育まれる各地の土を漉き込んで作った和紙。田中さんが竹尾ペーパーショウ2018で初めて制作し、探求しているマテリアルの一つ。企画展「スープはいのち」では、土紙で大屋根を制作。この屋根の下では、太古から時代とともに移り変わってきた衣食住の営みが再現されている。

田中　本当ですか（笑）。実際、触れる機会は多かったと思います。小さい頃からみんな紙で遊びますけれど、これだけ日常的に紙に親しんでいる国も少ない。しかも、日本は紙の種類もとにかく豊富です。もともと大陸から入ってきた文化が地域に根ざして変容していった結果、和紙が生まれたと思うんですが、遡っていくとほぼ農作物に近い存在なんですよね。身近な植物で作ったものを、ありとあらゆる生活用品に展開していったのが日本人のすごいところ。

そうやって手元でさまざまなものを生み出せる文化は魅力的だし、圧倒的に自然と共生したサイクルが 1,000 年以上前から存在していることが素晴らしい。明治以降、大量消費の流れのなかで産業的には洋紙に負けてしまったけれど、今はかつてほど紙を必要としない時代になってきています。和紙のユニークさは見直されていくと思うし、日本人が古くから実践してきたことを改めて解釈して、今の生活に必要な和紙のあり方を考えていきたいんですよね。

遠山　それってスープとも近いような気がします。どちらも衣食住において歴史があるし、風土によって変容してきたものですよね。

揺らぐ世界で、食と居場所から生きる基盤を考え直す。

遠山　本展で企画協力いただいた小池一子さんは戦争体験者なのですが、現代について「こんな時代を生きることになるとは思わなかった」とおっしゃっていて。世界が同時多発的に歪んでいくなかで、私たちはこの先どう暮らしていけるのかという問いに向き合わざるを得ない。最小限の暮らしに立ち返って、揺るがない野性を取り戻すことで、生きる基盤をもう一度見つめ直す必要があると思っています。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

「スープはいのち」というメッセージにも通じるのですが、それが精神の豊かさにもつながっていくはず。生活における余白や遊びは大切なものですが、世界を見渡せば、そのような余裕すら許されない状況で生きる人たちも数多く存在します。ガザに、心の灯台といわれるカフェがあったんです。学生やアーティストが集まって、お互いの生存を確かめ合うような場所だったのですが、それはある意味、自分たちで希望という心の余白を作る取り組みだったと思うのです。現代の都市においても、人がゆるやかにつながれる場を作ることはとても重要ですよね。そうした場における食の役割として、ストリートフードの可能性を見直したいと思っていて。ストリートフードは、古典的な作法や規範から解放された、自由な食文化といえますよね。だからこそ他者と集いながら、ほどよい距離感を保って心地よく過ごせる。そして食を共有するには「何を食べるか」だけでなく「どこで食べるか」も重要で、できることならその場には土や植物の気配があってほしい。

アルバカ・カフェ

パレスチナ自治区ガザ市北部にあった、地中海を臨むカフェ。学生やアーティスト、記者らが集い、戦時下でも美しい海を眺めながら憩う貴重な場となっていたが、2025年6月30日（月）にイスラエル軍の空爆を受けた。

目まぐるしく変化する都市における住環境の理想形とは。

田中　都市って、目まぐるしく変化することが普通じゃないですか。だから強固にその場所を保とうとするのではなく、変化を楽しんでテンポラリーに、身軽に生きていけるほうが健全な気がします。東京ミッドタウンだって毎日のようにイベントが開催されていて、久しぶりに来るとまったく違う風景が生まれている。それって田舎に住んでいる人からすると、ありえない光景じゃないですか。都市の存在意義は絶えず変化することにあると思うので、それを住環境にまで広げていけたらいいと思っていて。もっと軽やかな家があってもいいだろうし、常に移動できてもいいはず。

江戸っ子は、本当に大事なものを床下を掘って甕に入れておき、それ以外は手放してもいいくらい身軽に生きていたそうです。長屋で火事が起きたら家を破壊することで火をせき止めたりして、まったく未練がない。今はあらゆる情報が入ってくるし、ものや環境がそろっているからこそ、抱え込むのではなく、より身軽に生きていくことが真の豊かさなのではないかと思います。その点、和紙も屋外で使える建材の可能性を秘めていて。それこそ和紙でできた家は、強固なものには絶対にならないし、周辺の環境にすごく左右される生活になるでしょう。でも、そういう暮らしにこそ生きている実感が宿るでしょうし、自らの置かれた環境とつながるための装置として、住環境を捉えていきたいですよね。

遠山　テントやパオのような最小限の住居を見ても、人間の歴史は移動の歴史ともいえる。人は本来、限られたもので豊かに暮らすための創意工夫の精神を備えているのでしょうね。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.



published_2026.06.10 / photo_kenta yokoyama / text_ ikuko hyodo

パフォーミングアーツのように人を巻き込む街に。

遠山　私にとって六本木は日常の延長とは言いがたい街ですが、文化に触れることができて、意思を持った場所が多くある街というイメージ。パリのバスティーユに、高架下をギャラリーや工房として活用しているところがあって、実験的な展覧会を開催するなどとても豊かな場になっているんです。六本木も大きなビルから小さなギャラリーまで、大小の意思を持った空間が共存し続けられるよう、文化をつないでいくことが大事だと思います。

田中　私は、高層ビルなどが建つ前に見学会をしてほしいなと思っています。

遠山　面白いですね。

田中　大学院の授業で、建設中のビルや解体現場を見学させてもらったことがあるのですが、とても興味深くて。ビルが建つ前の更地になった状態って、なかなか目にする機会がないですけれど、それこそ完全に土なんですよね。そういう状態の空間が、数週間でも 1 カ月でも開放されたら、都市のど真ん中にいながら自然を感じられると思うのです。六本木にはすでに世界中からいろいろな人やモノが集まってきて、十分に刺激的で楽しい街になっている。だからこそ、この特殊な街で大地に立っていることをダイレクトに感じられるような、自然と向き合える瞬間があったらハレーションを起こすと思うのです。そういうことをもっと気軽に体験できたら、新しいビルができるときのワクワク感も違うだろうし。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

遠山　そうですね。さっき話したストリートフードも、六本木にはデザインやアートの場があるからこそ、パフォーミングアーツみたいに人を巻き込むことができそうな気がします。

田中　その場所をキープしていくとなると大変だろうけれど、テンポラリーに変化していく自由度が、隙間ごとに存在するのが理想的ですよね。大きなビルが建つような空間には、都市ではあり得ないくらい広い運動場ができるはず。期間限定でその場を活用して楽しんで、また新しいビルができて ..... という、変化を面白がれるシステムがあると楽しいですよね。

今後高まる、保存やアーカイブの重要性。

遠山　繰り返しになりますが、私は身体的な体験の場をどう共有していけるかを考えるのが好きなので、今後も時間と空間、場のデザインを大事にしていきたいと思っています。「スープはいのち」のその後というのも、何らかの形でやってみたい。本展に参加いただいた写真家の津田直さんが、「時間の積層のある詩集のようなもの」を一緒に作りませんか？　と仰ってくれたのですが、そうしたものを今後作っていきたいです。この展覧会を通じてさまざまな人と出会えたからこそ、ここから変化していくプロセスや、新たに生まれるものを可視化していくことが大事だと改めて感じました。

田中　私の最近の興味は保存していくこと。美術でもデザインでも同じなのですが、特に美術の領域では作品の数は年々増え続けているのに、それらを展示して見せる機会や、適切に保存しておくためのスペースが不足しており、バランスを保つのが難しくなってきているんです。デザインに関しては、そもそも作品を保存する美術館が日本には少ないので、企業が頑張っていたりするのですが、なかなか手が回っていない状況です。現代のデザイナーがそういった作品にアクセスできる場が限られているのも問題で、無意識に過去の焼き直しをしたり、新たに思いついたアイデアのつもりが、すでに掘り下げられていたものだったりする。今のデザインももちろん大事ですが、過去から学べることもたくさんあるので、今後は保存のあり方も考えていきたいと思っています。

遠山　その重要性にはものすごく共感します。自分の仕事でも感じることですが、過去の作品の哲学やプロセスを通して、私たちが新しくデザインできることも多いから ..... 応援しています！

田中　頑張ります（笑）。

撮影場所：21_21 DESIGN SIGHT 企画展「スープはいのち」（2026 年 3 月 27 日〜 8 月 9 日）

取材を終えて .....

スープというテーマの身近さや、身体感覚に共鳴するような展示構成だからか、いつもよりファミリーが多いように感じた企画展「スープはいのち」。子どもたちが楽しんでいるのが印象的で、その姿を見つめる遠山さんはとてもうれしそうでした。対談中、遠山さんが田中さんを「ケアの精神がある」と表現していましたが、その言葉が何よりの信頼の証で、媒介者としてのデザイナーに究極的に求められる資質なのかもしれません。そして田中さんだけでなく、遠山さんにもケアの精神を大いに感じたひとときでした。（text_hyodo ikuko）

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.